

東京から一番近いレタス産地

——業務加工用秋冬どりレタスの供給力拡大に向けて——

理事研究員 小掠吉晃

1 冬に不足する国産レタス、 農地はまだあるのだが

日本最大の青果卸売市場、大田市場から東へ30km、東京湾の向かい側に千葉県袖ヶ浦市がある。温暖な気候に恵まれ、秋冬どりレタスの栽培が盛んだ。毎年、秋から冬にかけレタスは品薄となり価格は乱高下し、不足分は台湾等から輸入される。生食需要がほとんどで傷みやすいレタスは国内調達が好ましく、国産レタスの供給力拡大を求める声は大きいのだが、毎年国内需要の3%程度が輸入され、その量は近年増加傾向にある。最近では植物工場に期待する動きもある。

袖ヶ浦地区では稲作の裏作にレタスが栽培される。水田と畑の交互利用は、連作障害が抑制され、効率のよい農地利用形態だ。消費地からも近く好条件がそろっているのだが、稲作の後に何も植えられていない農地も目立つ。稲作は高度に機械化され少人数で大面積の耕作が可能だが、レタスは機械化が進んだとはいえ手間のかかる作業が多く、耕作できる面積が小さくなるためだ。

2 業務加工用レタスの生産拡大の取組み

こうしたなか、レタスの生産拡大に取り組む

農業法人がある。(株)切替農園(千葉県袖ヶ浦市)は家族4人、社員6人の体制で、主に水田40ha、レタス10haを営む、当地区のリーダー的レタス生産者だ。当社はこの地区で業務加工用レタスの産地育成に取り組むJAきみつと連携しながら、年々規模を拡大している。

レタス栽培には幾つか作業の山があるが、作業時間が特に多いのが収穫のときだ。労働力に制限があるなか生産量を増やすため、当社は次のような戦略を取っている。

(1) 作業量・作業パターンを減らす

まず育苗と販売・出荷の工程を全てJAに委託しほ場作業に専念できるようにした。また、業務加工用の栽培に特化したことで、大玉規格、ラッピングなし、コンテナ詰め、という出荷形態に統一された。工程がシンプルになり大ロットで処理できるため、出荷重量あたりの作業時間は大幅に軽減された。

(2) 機械化による処理能力向上

当社では、トンネル支柱立てをはじめ、可能なものはすべて機械化したという。たとえば収穫作業では、刈り取りとコンテナ詰めまでは手作業だが、後は畝またぎ運搬車とフォークリフトが活躍し、レタスの入ったコンテナはほ場でパレット積み状態でトラックに載せられる。

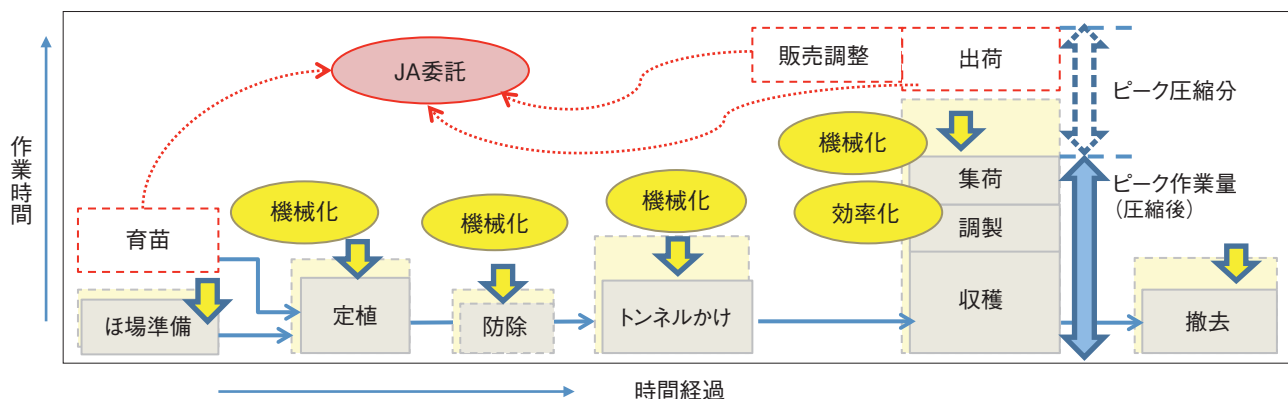


写真 (左から)収穫風景、畝またぎ運搬車、フォークリフト

3 ピークをならせば 生産量は増やせる

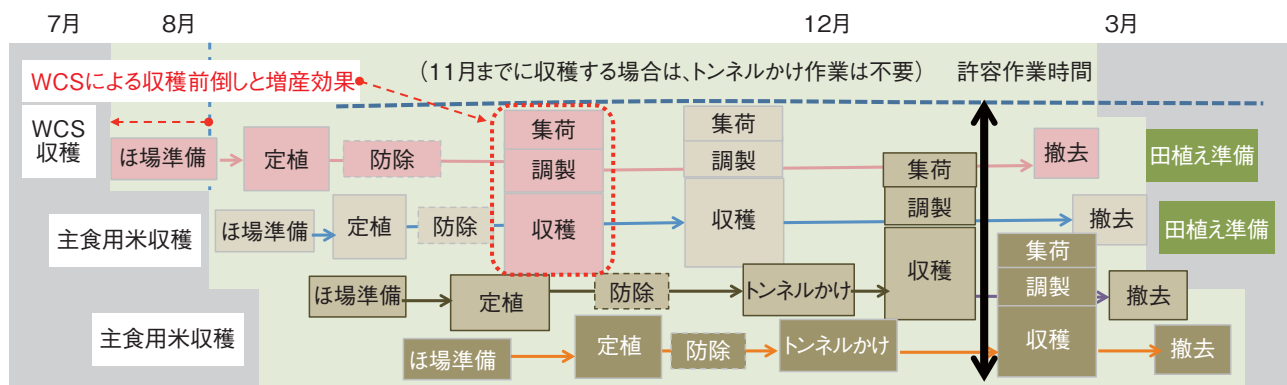
以上は各作業の山を低くする話だが、栽培全体においては複数のほ場で作業が並行して進むた

第1図 冬どりレタス(トンネル保温)栽培の工程とピーク作業時間のイメージ



資料 筆者作成

第2図 WCS導入効果イメージ図(簡略化のため実際の作業時間・作業時期を正確に反映していない)



資料 筆者作成

め、作業時期を少しずつずらし作業の山が重ならないようにする必要がある。特に収穫作業は最も手間がかかるうえ、レタスの収穫適期は1週間と短いため、ボトルネックになりやすい。さらに天候によって成長速度が変わるため収穫時期は何週間も前後する。後に植えたレタスが予想外に速く育ち、前に植えたものと収穫が重なった場合、取りきれずに廃棄されることもある。

定植を早くから始め期間を長くすれば、収穫期間も長くなり、作業ピークが分散することで作付面積を増やせるのだが、稲作の都合では場が使える期間は限られる。そこで当社が採用した対策は、主食用米より1か月早く収穫できる飼料イネ(WCS)の導入だ。現在3haを飼料イネに転換し、そこからほ場準備を早めに開始している。

4 地域資源活用と安定供給を目指して

農地や労働力の過不足をみるには時間軸を意識することが重要だ。労働力が希少となった昨今では作業ピーク時の処理能力が作付面積の制約になるが、そのボトルネックを少しでも緩和すればその分だけ生産量は伸びる。一方で野菜の需要は業務加工用に大きくシフトしている。業務加工用は需要者のニーズが明確でロットも大きいため、それに合わせたシンプルな機械化生産体系が作りやすい。

当社はこうした環境変化を的確に捉え、10～30代の若い社員とともにレタスの生産拡大に取り組んでおり、また、JAは業務加工用野菜の産地づくり企画、作業ボトルネック緩和等、新たな役割を担い生産者を支えている。

(おぐら よしあき)